

〈共同研究報告〉

共同研究報告 序

以下の三篇は共同研究「江戸時代の芸術における外国文化（中国を中心として）」の受容と変容」の報告書のうちである。

この共同研究がドナルド・キーン教授を班長として開始されたのは当研究センター開設と同時、すなわち昭和六十二年五月のことであった。キーン教授退職に伴って平成元年一月以降は私が班長を引き継ぎ、平成四年三月末に五年におよぶ共同研究を終結した。すでに『日本研究』第九集（平成五年九月刊）に掲載を見た源了圓「幕末・維新期における『海国図志』の受容——佐久間象山を中心として」、吉田孝次郎「祇園会と渡来懸装染織品」の二篇もまたこの

共同研究の成果に属している。

このたび掲載される三篇はいずれも「見立て」を論じている。このテーマは、共同研究の進行過程でいわば人工衛星のように打ち上げられたサブテーマである。当初のテーマがあまりにも総体的で大きすぎるために、研究会をかさねるにしがたって発表の内容は個別に展開し、とめどもなく拡散する傾向を示した。「見立て」という切り口を設けて、そこから巨大な西瓜のようなテーマにさぐりを入れ、種の有無、身の詰まり加減をたしかめる。あきらかに新局面がひらけた。成果はごらんの通りである。もっとも、「見立て」なるものは時代の趣

杉本秀太郎

味あるいは憑きものであって、人々が老いても若きもこれに打ち興じているうちが花、醒めてしまえば、はかなく、わびしく、つれない一場の夢のようなものと思っている者には、「見立て」も釣り餌にはならなかった。何事の見立てにも似ず三日の月。班長本人が芭蕉のこの一句に「見立て」の果てを見ていたのでは、何ともならなかった。おわびの仕様もない。川井ゆう「花を衣裳になぞらえるということ」は、共同研究の当初から所外メンバーだった多田道太郎氏の推挙によって、私どもの目に触れることになった論文である。